

提言

「地団駄踏んで、今学ぶ」



きずな編集長

猪股 浩介 さん

私が「同和」教育推進教員になりましたのは、1994年でした。他の人のようにいろいろかわっていきなりまして、突然でしたのでよく分からず「教科学習」と言われたらですね、パワーアップの「強化学習」かなと頭の中で出てくるぐらいの感じだったんですけど、おそらく推進教員になってから学校の人権教育関係の戸棚を開けて「きずな」を読んだと思います。あれ、部落民たい」を読んだ時は、「こんなことが書いてあるのか」と凄く衝撃でした。そして経済的な貧しさとかが、父親と重なった感じがしました。今から30年くらい前に私が独身最後の頃、父親から突然手紙が来ました。父親の小さい頃の話が書いてありました。うちは貧しかったから小学校4年生の頃から新聞配達をして、そのバイト代は勿体ない

から貯金した。中学2年生の時に父親の父親が倒れて病気で入院したので、婆ちゃんと二人で豆腐屋を始めた。大豆のお金は新聞配達のお金を下ろして充てたという話を書いてあって、父親のことを知ってから、そのことをふっと思い出したりしながらの「同和」教育のスタートでした。

今回の改訂で、新教材「地団駄踏んで、今学ぶ」を掲載しました。私は、2001年から定時制で担任をしました。今でこそ1クラス十数人というのが多いですけど、41人でスタートでした。その中の一人が桜井幸子さん（仮名）でした。56歳で定時制に入られ

たんです。幸子さんは子どもを育て上げて、仕事もある程度して、仕事を辞めて、旅行したり楽しんだけれど、「胸の隙間が埋まらない。何かしたい」ということで56歳で「定時制って誰でん行かるってな？」と訊いて、定時制の先生が、「幸子さん、定時制は勉強したい人が来るところですよ」と答えたのを聞いて受検します。本当は受ける前に「やめよう」とかあったりするんですが、結局受けることになって、その時の様子を作文に書いています。

その日は3月というのに朝から雪がちらつく寒い日でした。41年振りの試験に胸は高鳴り、不安と心細さで頭の中は真っ白でした。そんな思いで入学試験の集合場所である体育館に向かっていたら、突然、先生から呼び止められました。「何だろう？」と不思議に思いました。そしたら、

「ここから先は父母の方は入れません。」と言われたのです。「えっ」と思いました。「あ、う、私も受けるのですけど。」と答えると「ハア？」と、まるでハトが豆鉄砲でも喰らったかのようにでした。そして、口を開けたまま、私の顔をまじまじとみて、何も言わずに黙って見送ってくれました。ところが今度は体育館の階段を上った所で、「付き添いの方は下に控えてください！」と止められてしまったのです。「私が、あ、う、私も受けるのですけど。」と同じことを言うと、二人の先生が顔を合わせ、首をかしげ何か「こそ」話しておられました。無視してスリッパに履き替え、体育館に入ろうとするのと三度目のストップ。黙って何にも言われないので、私も黙って受験票を差し出しました。するとまた同じ。私の顔を

をまじまじと見て言葉も出ないようです。普通、「失礼しました。」とか、私ならきつと言うのにと腹が立ちました。やっとの思いで体育館までたどり着きました。後で考えると、無理もないと思いました。56歳の私が受検するのですから。

ということ、受検の時から3回呼び止められ、そして合格して入ってきました。入ってきた時どんな様子かという、

4月に入学して自分の居場所さえ分からず、戸惑うことばかり。学ぶことはこんな苦しいものとは思ってもありませんでした。どんなに勉強しても身に入らず、頭の中は混乱するばかりです。自分に絶望してか、学校行くのに足が進まず、重い足を引きずりながら通ったこともあります。

(28ページ「提言」続き)
毎日毎日自分との闘いでした。

なかなかしばらくは慣れない感じで、その頃から短歌を詠むようになりました。

学校の庭の広さにたどろいで自分の居場所探し居る

中学校までと違って点数が取れないと留年ということになるので、問題は試験です。

そんなこんなで期末考査が始まりました。私の身体に変化が起こります。胃の痛みが走ります。「甘えてはいけない。今度は頑張らなくては」と自分に言い聞かせ、勉強しました。一科目、30ページ書いて覚えようと努力しました。目で見てもなかなか頭に入りませんので、自分なりに努力したつもりですけど、答えは出ません。情けなさ。「なぜ?」と自分で地団駄踏んでもどうにもならず、苦しみました。

その時詠んだ句が題名にもなっています。

遠い日にすてた勉強とりもどす地団駄踏んで今学ぶ

卒業を前にした作文です。

子どもの頃よりも落ち着いてゆっくり勉強できたと思います。そして人間も磨いていただきました。少し自分が優しくなったと思います。有意義な4年間でした。たくさんの思い出がありがとうございました。定時制に出会えて幸せでした。本当にありがとうございました。卒業しても定時制の思い出は一生の宝です。

卒業式には新聞の記者が来られて写真を撮って記事にしてみました。

学校でとまどいながら四年間家族と分かť卒業証書

幸子さんは、2001年に入学して、2005年に卒業しました。2019年の九同教夏期講座の最中に教え子の結婚式があり、幸子さんも同級生ということでも来られました。幸子さんは、「マエちゃん、あんたのおかげでみんなこうして会えたけん、よかった。ありがとう」と言っていました。

2020年3月23日でした。幸子さんの名前で登録している携帯の履歴があつたんです。「あら、何だろか」と思って電話をかけると息子さんの声

で「先生、すいません。突然ですけど母が亡くなりました。葬式をするので、来てくださーい」という電話でした。みんなでお通夜と葬式に参列しました。

この「きずな」を発行するにあたっては、原稿を家に持って行きました。「幸子さん、4年間のバラバラだった作文をつなげました。短歌もこんな風に入れます。文章に間違いはないですか、読んでください」と言ったのが編集委員会の最初の頃でした。4枚中、2枚目を読んだところ、あたがすることと吉田さんがすることなら文句は言わんたい」と言ってもらいました。

是非、今回も大切な「きずな」ということで、私自身も我々のなかまも大事にしていきたいと思っています。